

技術革新模索

長は、米国でも展開する計画を明かす。

世界の医療をリードしている

のは米国。事業化に成功すれば、欧州などにも拡大させやすい。

米国の基準で安全が確認されれば、自国での審査を一定免除すると打診してきている欧州の国もあるという。「世界展開は、

米国抜きでは考えられません」。日本の技術を広げたいからこそ、視線は海外へ向いている。

「僕らも少しは役立ったのかな」。兵庫県西宮市の高田忍さん(75)は、iPS細胞から作った血小板製剤の技術の進展を聞いて、感慨を漏らす。11年12

月に亡くなった妻の幸子さんと一緒に、研究へ寄付金を贈ってきたからだ。

幸子さんは10年8月、血液の幹細胞に異常が生じるがん「骨髄異形成症候群」を発症した。

抗がん剤は効かず、輸血で症状を和らげる対症療法が続いていた中、iPS細胞から血小板を作る研究を知った。「成功してほしい」。幸子さんの治療に役立つわけではないと分かっていた

ても、支援せずにはいられなかった。目にした新聞記事に名前が載っていた江藤教授が所属する同研究所や東大に、11年夏から寄付を続けてきた。

忍さんも14年、「加齢黄斑変性」を発症した。iPS細胞の研究はさらに切実となった。最期の瞬間、さしのべた手を握り返してくれた幸子さん。「妻と一緒に朗報を待ちます」

しかし、実用化に課題は残っている。iPS細胞から作った血小板を、実際の輸血事業として成り立たせるには、週に輸血数千回分を生産する必要があるが、現状ではまだ週に1回分が限界。iPS細胞から作った組織の供給元である同研究所のストックの充実も途上だ。

「将来の医療を変えられる貴重な発見をなんとかしても形にしたい」。プレッシャーの中、三輪社長は技術革新を模索している。

3面に続く